

星涯の会 2009

HOSHINOHATE no KAI 2009

SPACE FORCE

B29の小さな話

政四 野田宏一郎

(1)

おそい夕食を済ました頃、市役所の新海さんから電話がかかって来た。

「早速だがね、君、B29が落ちたのを憶えているかい？」

「B29?。ああ、あれはB29ぢやありませんよ。去年でしよう、城西橋に落ちたの。ありやF100ですよ。」「いや、いや、それぢやなくて、戦争中さ、たしか伊津村におちただ。搭乗員がパラシュートで降りたんじゃなかったかと思うんだが……。」

そう云われればたしかにそんな事があったな……。そう。あれは八月の二十八日だ。

「思出しました。たしかに落ちましたよ。伊津村のたんぼの中ですよ。」

「思出したかい？ たしか君は防弾ガラスなんかを大事にしてたぢやないか。」

あの頃……そうだ。あれは俺の凄い宝物だった。

「済まんが君、ちょっと来て呉れないか。頼みがあるんだ。」

ひよっと君を思出して電話をして見たんだが……。今、役所の車を廻すからね。すぐ来て呉れよ。お父さんによるしく。」

新海さんは、家が空襲で焼ける前に僕達が住んでいた町の隣組長をやっていた人である。あの爺さん、B29だなんて、一体俺に何の用事があるのかな……等と考えている内に迎えの車がやって来た。

通された市役所の応接室にはアメリカ人の若い娘が、新海さんに向い合って坐っていた。ミスM。二十二・三才、ほっそりとして面長の静かな感じ。およそ街で見かけるアメリカ娘とは違って見えた。挨拶が終ると彼女は新海さんに聞いた。「この方は英語はおわかりですか?。」そして「a little」と云うわけで彼女は話し始めた——しずかなアルト。

「私の父は大戦中、合衆国陸軍第十四航空戦隊所属の少佐で、四四年、中国の成都からの日本本土爆撃作戦に参加していたが、同年八月 作戦中に戦死した旨の通知を受けた。

その時、私は未だ幼なかったがその後どうにかして父の死についてくわしい事情が知りたく思い 当時の司令官だったシェノート将軍に会ったり、当時父の部下だった人をさがしたり、国防総省の記録をくったりして、ようやく四十四年八月二十八日午後、父の乗機が福岡市(彼女は“フケオーカシティ”と発音した)の郊外で撃墜された際に戦死した事実を確認した。私はどうにかして父の死んだ場所を訪れたくて学校の余暇にパートタイマー等で貯金し、色々工面をしてとに角やって来た。しかし……」「フケオー

カシティ”と云ったって広い。三日前に着いて以来、散々さがしまわったらしいが十年以上も昔の事とておいそれとわかる筈もない。

アメリカ文化センターからの間合せが偶然新海さんの所に廻って来て僕の事を思出したと云う訳である。八月二十八日の午後。

もしもそれに間違いがなければたしかに心当りがあった。僕が未だ国民学校の五年生の時である。

吾乍らウンザリする様な英語で僕はこんな風に答えた。「あなたがおっしゃる所の飛行機であるかと思われる所の飛行機が墜落するのを、私はたしかに目撃した様に記憶している。

当地より西北約八マイル、そこには小さな村があり、その近くに墜落したと私は聞いている。」「生存者は?」やはりあきらめきれぬのであろう、彼女は体をのり出す様にしてそう云った。「二名が落下傘で降下したのを記憶しているが果して如何になったかは残念乍ら知らぬ。おそらく死亡したのではあるまいか」「Oh……」

(2)

B29と云う言葉はそれ丈で多くの人にまるで悪夢の様なあの時代を思出させるに充分なひびきを持っている。しかしB29が一般市民にとって本当に恐ろしい存在となったのは昭和十九年秋、マリアナ失陥後ルメイ将軍麾下の第二十航空戦隊の擁する九百五十機に及ぶB29による、都市に対する無差別焼夷弾爆撃が開始されて以来の事であって、それ以前はるか中国本土の奥地、四川省成都から時折北九州の工業地帯を狙ってやって来る少数のB29は、当時未だ幼かった僕にとってはある不思議な透明さをさえ持っていた様な気がするのである。

カルカタからアラカン山脈を越えて成都迄、真新らしいB29を空輸する苦労はコリソンの著書の中に克明に描かれていて興味はつきないが直線距離にして約二千二百キロ、成都を発進したB29は、公称巡航速度、満載時四百十キロ/時として約五時間余りを費してやって来る訳である。ほぼ楊子江沿いに東進するコースをとるのがそれらの動きを奥地で探知していた陸軍の通信活動については阿川弘之の「春の城」等にも出て来る。そして北九州地区は午後も大分おそくなってから警戒警報が発令されるのを常とした。

さあ、今夜は来るぞと云う事になると、家中が何となくワクワクする様な興奮に包まれてしまう。そんな時僕はよく屋上の物干しに上って見た。

夕陽——遠い大陸の奥地からは今「奴等」が一路九州へと近付いて来つつある。

奴等の翼もきつと夕陽で真っ赤だろうな。

そう思うと僕はもう、只わけもなく胸がふるえるのだった。

「B29の小さな話」と兄のB29

野田 玲二郎

これは兄宏一郎のSF以外の作品の中で最も初期に日の目をみたものではないかと思う。出版されたのは大学4年のときで、昭和33年12月(1958)だ。彼がフジテレビに就職が決まったかその少し前かだろう。(SFについては1958年4月から4回、宇宙塵に掲載されている)

この短編が掲載されたのは学習院の「輔仁会雑誌(ほじんかいざっし)」である。輔仁会と言うのは学内のクラブ活動を束ねた校友会の名称であり、その雑誌は古くは武者小路実篤、志賀直哉など白樺派の人たちが活躍の場としていた。その後三島由紀夫などの文も見られる。

学習院は戦争が終わるまで、成蹊、成城、武蔵などとともに旧制高校のある7年制の学校だった。戦後は新制大学となったがこのような文芸活動はそのまま引き継がれ、この180号にも指揮者の近衛秀麿さんの文が掲載されている。兄の初期の短編、「B29の小さな話」はこのような雑誌に掲載されていた。

今年の夏、「星涯の会2009」の冊子に兄の思い出を書いてくれないか、とのご依頼を受けた。何を書こうかとあれこれ思い悩んでいたが、もし家族が何かを書くとすれば、兄がまだ世に出る前の、若いころの話ではないかと思った。そしてふとこの輔仁会雑誌のことを思い出したのである。しかし大学4年の終りに出版されたこの古い雑誌はなかなか見つからず、結局大学の図書館に出かけることになった。雑誌はすぐに出てきたが、かなり痛んだものだった。

さてB29はサイパンから飛んでくるようになった後、焼夷弾で日本を焼き尽くしたり原爆を落としたりした飛行機なので、戦時少年の私はこの機をなかなか素直に見ることが出来なかった。しかし兄はB29を見てアメリカの豊かさを感じ憧れたのだろうか、特別の思いを寄せていたようだ。

最近兄の蔵書を整理しながら感じるのは、彼のB29へのこだわりが生半可なものではないことである。初め不思議に思っていたが今回改めてこの文を読んでみて、B29が彼のライフワークの一つになっている理由が次第に分かってきた。このスタートは墜落した機体を調査から帰った父の話しと、そのとき父が持ち帰ったB29通信機の部品に接した少年期の体験だろう。

この短編は彼のB29ものでは第一期に書かれ、そして二期はアリゾナにある空軍のヤードに実機を見に行ったとき、そして次は操縦マニュアルの翻訳だろう。彼の構想では完結編としてB29で実際に飛んでみることを、それを夢見ていたかもしれない。B29で思い残すことがあるとすればこれだろうか。私は勝手に想像している。

この輔仁会雑誌が出版されたその日の午後、兄は音楽クラブの部室に現れた。たまたま私はその場に居合せたのだが、友人たちから祝いの言葉を受けながら「選考は相当厳しかったが何とかパスしたそうだ」と文芸部の友人に聞いた選考会の模様を嬉しそうに話していた。もう半世紀も前のことだ。(終り)

明らかに両親の影響なのだが、戦時下だと云うのに僕はアメリカに対して敵国である事実とは又別に、ある不思議な親近感を抱いていた。あの時代にさえ僕は母が買い溜めておいたラックスの石鹸やコールゲートの歯磨粉を使っていたのだから非国民ぶりも相当なものだった訳だ。

その頃の事が母の本棚に山と入っていたレディースホームジャーナルとか何とかそんなたぐいの本の中に、今も忘れられない本が一冊ある。当節はやりのラナ・ロベルみたいなどともきれいなスタイルブックである。当時僕は副級長——そんな女々しい本に目を呉れるなんて毎朝竹刀を腰に肩で風切って登校する「少国民」の誇りが許さない。でも僕がそれを見ずに居られなかった訳は、その本のモデルの一人がこの間引越してしまった英子ちゃんの姉さんにひどくよく似ていたからなのである。

英子ちゃんの姉さんはすごくきれいな人だった。僕には姉さんがいないからもう英子ちゃんがうらやましくて仕方がなかったのだ。

「ネグリジェ」等と云う高級な言葉を知ったのはつい先頃の事、それ迄は「頭からひっかぶる寝巻き」とでも呼ぶのだ

ろうと思っていたのだが、そのスタイルブックの「英子ちゃんの姉さん」は今から考えて正にそのネグリジェを着用に及んでいたのである。しかも目のさめる様なバラ色の奴を。

こっそりとそこを開く度に僕は胸がドキドキしたものだ。そしてこんな娘がたくさんいるらしいアメリカと云う国をうらやましく思ったのだから僕は随分早熟だった訳だろう。

学校ではアメリカ軍の残虐行為の話を開かされ、ルーズヴェルトのワラ人形を銃剣で干干しにする訓練の毎日だったが家に帰ればまあそんな訳でアメリカと云う国は、何か別のとても不思議な匂いのする国に思えたのである。

奴等がはるばる僕達を襲いにやって来る——夕陽の中でそう自分に云い聞かせて見ても、ちょうど月蝕を待つ様なそんな神秘感丈がピンと来て、ちっともこわくなんかなかった事丈はたしかなものである。

灯火管制下、暗い灯の下に家族の顔丈が浮ぶ茶の間はふだんとは違った親近感にあふれる。そしてその中で何かワクワクする様な夕食が済んでみんなが思い思いに仕事を始める。僕達が宿題、母が編物、父が新聞をひろげる。

野田さん年譜

野田宏一郎さんの略歴と、主に野田昌宏さん名義で行った著書／訳書を中心に、年代順にリストしています（雑誌・書籍は奥付に記載された発行日順にリストしていますので、実際の発売された日と異なる場合があります）。野田さんが解説やメッセージを執筆している書籍や、企画に関わったゲーム・映画、また野田さんについて述べられている文献、インタビュー記事等についても可能な限り記載しており、今回のバージョンから各項目の右上に「区分」を追加しました。小説の解説や、雑誌の記事の一部を野田さんが執筆している場合は、書籍名よりも記事の名称を大きく記載しています。書名の横に*があるものは、宇宙軍参謀本部にて現物を確認できていないものです。また、このリストに記載されていない情報をお持ちの方はぜひお知らせください。

記 載 内 容

西暦／元号／野田昌宏の年齢

発行年月日 区分

掲載誌／シリーズ名
書名・記事タイトル

原作者(野田さん以外の著者・訳者・編集者等)／原題(原書の発行年:翻訳の場合)／英語タイトル／出版社／文庫番号／判型／ページ数(掲載ページ)／価格／カバー・口絵・挿絵などの情報／その他の情報

区分の記載が無い項目は、イベント、関連ニュースなどの情報

1933/S8/0

1933.8.18 野田宏一郎、父野田健三郎、母ツヤ子の長男として福岡に誕生

1938/S13/5

1938.4 大濠幼稚園入園

1940/S15/7

1940.4 福岡第一師範学校付属国民小学校入学

1946/S21/13

1946.4 泰星中学入学

1949/S24/16

1949.4 泰星高等学校入学

1953/S28/20

1953 浪人中に自動車普通免許取得(1956年8月1日の法改正前なので大型自動車運転可)／大学卒業後は、初代シャンプロウの「オースチンA50」から始まり、「セドリック」「フェアレディZ2/2」「マーチ」「ブルーバードSSS」「スカイラインGT-R」など日産車を乗り継いだ

1955/S30/22

1955.4 学習院大学政経学部政治学科入学／男声合唱団にリードテナーとして参加、混声合唱団のマネージャーも務めた／大量の本でまるで潜水艦の中の様だと有名な目白・鶴山荘入居／1971年世田谷・用賀にマンション購入まで住む

1957/S32/24

1957.5.15 「宇宙塵」創刊

1957.10.4 世界初の人工衛星スプートニク1号打上(旧ソ連)

1957.12 ハヤカワSFシリーズ創刊(早川書房)

1958/S33/25

1958.7 柴野拓美 創設のSF同人 科学創作クラブ「宇宙塵」編集委員会に参加

1958.4 著作

宇宙塵 11号(58年4月号)*
SFつれづれ草

科学創作クラブ／A5判／カバー:志村靖夫

1958.11 株式会社フジテレビジョン アルバイト入社

1958.12.24 著作

学習院輔仁会雑誌 第180号*
B29の小さな話

学習院輔仁会／A5判／294P(208P-218P)非売品／野田宏一郎名義／学習院在学中に学内文芸誌に掲載、初掲載小説／→星涯の会2009パンフレットに再録(2009.12.31)

1959/S34/26

1959.3 学習院大学政経学部政治学科卒業

1959.7 翻訳

宇宙塵 23号*
蠅

G・ランゲラーン／THE FLY(1957)／科学創作クラブ／A5判／カバー:志村靖夫／野田宏一郎名義

1959.12 SFマガジン創刊(早川書房)

1962/S37/29

1962.5.27 第1回日本SF大会「MEG-CON」／開催地:東京都 日黒公会堂清水記念館／参加者:約180名／野田宏一郎は残念ながら参加出来ず

1962.5 著作

宇宙塵 55号(5月号)*
新・SFつれづれ草

科学創作クラブ／A5判／カバー:江口まひろ／野田宏一郎名義／連載開始 68号(1963年6月号)まで計9回掲載／→星海企業(ファン出版):「宇宙塵版SFつれづれ(1997.8.16)

1962.8 SFファンのオープン会「一の日会」東京・渋谷の喫茶店に毎月の一の日(1・11・21日)に集まって交流・親睦をはかる会が始まり、たびたび参加

1962.12.25 著作
SFマガジン 63年2月号 (第4巻第2号)
SF銀河帝国盛衰史
 早川書房/A5判/218P(36P-39P)/¥200/カバー:中島靖侃/野田宏一郎名義/SFマガジン初掲載

1963/S38/30

1963.2.1 ドラマ「夜の扉」(出演:坪内美詠子、馬淵晴子(馬淵晴子)、永井秀明)フジテレビジョン系列にて放送開始(金曜日13:00-13:30/1963.2.1-1963.9.27)チーフA・Dを務める。

1963.6.24 宇宙塵6周年記念祝賀会/8ミリ映画第1作「ONCE・UPON・A・TIME・MACHINE」原作・製作:広瀬正、製作:野田昌宏、出演:平井和正、中山弓子、豊田有恒、伊藤典夫、宮崎惇、加納一朗、広瀬正、柴野拓美他 公開

1963.7.25 著作
SFマガジン63年9月号 (第4巻第10号)
SF英雄群像

①バック・ロジャーズ

早川書房/A5判/186P(83P-90P)/¥190/カバー:中島靖侃/野田宏一郎名義/カバー表記「野田広一郎」と誤記/連載開始(1965年5月号まで計16回掲載)/→早川書房:単行本(1969.2.15)→早川書房:ハヤカワ文庫JA119(1979.12.31)

1963.9 創元推理文庫SF部門創刊(東京創元社)

1963.10.26-27 第2回日本SF大会「TOKON」/開催地:東京都 毎日ホール/参加者:約300名/「記念パーティ」を26日夕方に池袋「タカセ」にて開催。

1964/S39/31

1964.4 著作
宇宙塵78号*
アメリカの新TV番組
 科学創作クラブ/A5判/野田宏一郎名義

1964.7.25-26 第3回日本SF大会「DAICON」/開催地:大阪市 府立厚生会館/参加者:約150名/8ミリ映画第2作「怪獣カメラ」脚本:広瀬正、製作:野田昌宏 公開

1964.9 著作
宇宙塵83号*
第3回日本SF大会報告
「怪獣カメラ」始末記
 科学創作クラブ/A5判/野田宏一郎名義

1964.10 座談会
宇宙塵84号*
「幻想の未来」をめぐる
 座談会:司会:柴野拓美/出席者:伊藤典夫、広瀬正、山野浩一、今日泊亜蘭、佐々木宏/科学創作クラブ/A5判

1965/S40/32

1965 伊藤典夫氏らと一作家の全作品を読破して行う読書会「SFセミナー」を始める

1965.5.25 著作
SFマガジン65年7月号 (第6巻第7号)*
SF実験室
宇宙船風物誌

早川書房/A5判/188P/カバー:中島靖侃/連載開始/1969年9月号まで計47回掲載/→北冬書房:「SFパノラマ館」[宇宙戯画事始]<1965.10>[宇宙船分類学]<1967.3>[SF解剖学のすすめ その一]<1968.9>[SF解剖学のすすめ その二]<1968.10>(1975.11.15)/→東京創元社:「科学小説神髓」[SF科学発明縁起]<1966.9>[SF解剖学のすすめ]<1968.9-11,1969.1,1969.4-8>[宇宙戯画事始]<1965.10>[栄枯盛衰]<1968.12>[今昔編集者気質]<1967.6-1968.1>[今昔ふあん気質考]<1968.3-8>(1975.11.15)→東京創元社:創元SF文庫SFの-1-1(2008.11.21)

1965.5.31 著作
SF入門

編:福島正実/SFの英雄たち/早川書房/新書/426P(267P-291P)/¥480/カバー・カット:真鍋博/野田宏一郎名義

1965.7.27 「日清/ちびっこのど自慢」(司会:桂小金山治・大村昆)フジテレビジョン系列にて放送開始(~1969.9.29)ディレクターを務める。/最高視聴率39.7%(1966.8.26)、途中からカラー放送(1969.5.17)に切り替わった。/→扶桑社:「ロングラン」村上七郎(2005.6.20)に当時の野田さんの紹介有り(村上氏は当時の編成局長)

1965.8.25 翻訳

世界の科学名作9

百万年後の世界

エドモンド・ハミルトン/CITY AT WORLD'S END(1951)/講談社/A5判/240P/¥290/装本:中島靖侃/カバー・挿絵:依光隆/カット:古屋勉/野田宏一郎名義/解説:科学評論家・日下実男/SF(銀河連邦):SFマガジン編集長・福島正実/E・ハミルトン「時果つるところ」のジューナイル/箱入り

1965.8.28-29 第4回日本SF大会「TOKON 2」/開催地:東京都 日本学生会館・科学技術館/参加者:約400名

1965.9 著作

創元推理コーナー65' SF特集号

E・R・バロズの<火星シリーズについて>

東京創元新社/文庫/33P(4P-12P)/¥10/カバー・カット:日下弘/野田宏一郎名義/付録

1965.10 日本ファングループ会議発足 初代議長に就任一年間つとめて柴野拓美氏に譲る

1966/S41/33

1966.2.28 翻訳・解説

キャプテン・フューチャー5

太陽系七つの秘宝

エドモンド・ハミルトン/CAPTAIN FUTURE AND THE SEVEN SPACESTONES(1941)/早川書房/ハヤカワSFシリーズ3107/ポケットミステリー/202P/¥250/カバー:金森達/解説:ハミルトンとフューチャー・シリーズ一覧表/イラストカバー箱入り/→早川書房:ハヤカワ文庫SF54(1972.3.31)→東京創元社:創元SF文庫SFハ-6-13(2004.10.29)

1966.2 著作

宇宙塵100号*

アメリカSF史のための覚え書き

科学創作クラブ/A5判/野田宏一郎名義/→星海企業(ファン出版):「宇宙塵SFつれづれ草」(1997.8.16)